

日本語無生物主語他動詞文の許容に 影響を与える要因とその関係

熊 鴛

[キーワード：①無生物主語 ②名詞句階層 ③他動性 ④有対他動詞 ⑤無対他動詞]

1. はじめに

伝統的な日本語では、原則として無生物名詞は他動詞文で主語として使用されないと論じられてきた(外山 1973: 24-30、金田一 1981: 209-211、石綿・高田 1990: 104-112)。

(1) *コピー用紙が手を切った。

(1)は無生物名詞が主語となる他動詞文で、不自然に感じられるが、それに対して、日本語には無生物主語他動詞文が普通に存在し、自然な文も少なくないという指摘(かねこ 1990: 36-46、角田 1991: 39-61、熊 2009)もある。

(2) 各地でのリゾート開発計画もオートキャンプ場の整備を組み込んでいる。

(かねこ 1990)

(3) 津波が三陸地方を襲った。

(角田 1991)

(4) 景気が力強さを増している。

(熊 2009)

日本語には、(2)～(4)のように無生物名詞が他動詞文の主語になり得る文もあれば、(1)のような許容されにくい文もある。本稿では、無生物主語他動詞文の許容に影響を与える要因を探り、それらの要因の関係を整理する。

2. 先行研究

角田(1991: 39-61)と熊(2009)は無生物主語他動詞文の許容に影響を与える要因を探った。

角田は名詞句階層の観点から無生物主語他動詞文の容認性を論じた。名詞句階層とは、Silverstein¹⁾が豪州原住民言語の研究で提案したもので、名詞句に階層構造があるとし、(5)のように表している。

(5) Silverstein の名詞句階層

代名詞			名詞	
1 人称	2 人称	3 人称	親族名詞、人間名詞 ²⁾ 動物名詞 固有名詞 ³⁾	無生物名詞 自然の力の名詞 ⁴⁾ 抽象名詞、 地名

角田 (1991: 39-61) は名詞句階層を援用して無生物主語他動詞文の容認性を説明した。角田によると、無生物主語他動詞文では、主語になる名詞句より目的語になる名詞句の階層が高ければ、不自然な文 (例 6, 7) になり、主語になる名詞句より目的語になる名詞句の階層が低ければ、自然な文 (例 8, 9) になる。

(6) ?大波は私をさらった。 (角田 1991: 48)

(7) ?あの事件は加藤を驚かした。 (角田 1991: 48)

(8) 津波が三陸地方を襲った。 (角田 1991: 49)

(9) 大水が家屋を押し流した。 (角田 1991: 49)

熊 (2009) は文学作品と新聞社説から採集した無生物主語他動詞文の用例を対象に、角田の名詞句階層の説を検証した。その結果、名詞句階層の説に反する用例は文学作品では 118 例 (13.9%)、新聞社説では 24 例 (2.7%) あることが観察された。一つは主語が無生物名詞で、目的語が生物名詞の場合 (例 10) で、もう一つは主語が自然の力の名詞以外の無生物名詞で、目的語が自然の力の名詞の場合 (例 11) である。

(10) しかし羨ましいとは少しも思わなかった。むしろ大津の言葉が彼女を傷つけた。
(河) (熊 2009: 34)

(11) 泰山木の花が、美しかった。大きな花びらが、恐れずに雨を享けて咲いている。
(恍惚) (熊 2009: 141)

熊 (2009) は無生物主語他動詞文の出現が少ないことから、無生物主語他動詞文の容認性は名詞句階層の制約を受けると裏付けた。一方、その方法論では説明できない問題が 2 つあることを指摘した。一つは例 (10) (11) のような名詞句階層の説に違反した、つまり主語より目的語が名詞句階層において高い階層に位置するにも関わらず、許容されるものである。もう一つは名詞句階層に違反しない、つまり主語より目的語が名詞句階層において低い階層に位置するにも関わらず、不自然に感じる用例が観察されることである。

(12) ?台風が窓ガラスを割った。

また、(13) と (14) のように、主語名詞と目的語名詞が同じであるにもかかわらず、適格性に差がつくものもある。

(13) 黒カビが壁全体を覆っている。

(14) ?黒カビが壁全体を汚している。

熊 (2009) は名詞句階層の他に何か動いているという仮説を立て、他動性という観

点を導入し、無生物主語他動詞文の容認性を考えた。他動性とは、主語から目的語へ及ぼす影響のことである。熊（2009）では、「所属関係の文」、「能動的な文」と「受動的な文」に分けて、それぞれの他動性を考えた。

(15) プラスティックのケースの中で小さなクローバーが四枚の葉を広げていた。

(16) 津波が海浜の村落を襲った。

(17) 放課後のチャペルは樹木の茂った夏の庭からさし込む強烈な陽をうけていた。

(熊 2009: 110-111)

(15)は目的語「葉」が主語「クローバー」の一部で、熊（2009）では「所属関係の文」と呼んでいる。(16)と(17)は主語と目的語が2つの異なる物である。(16)のような主語から目的語への働きかけがある文を「能動的な文」とし、(17)のような形式上は他動詞の形をしているが、現実世界では主語が動作の受け手である文を「受動的な文」とした。熊（2009）で考察した結果、(16)のような「能動的な文」では、目的語に働きかける力を持つものが主語として必要とされるため、無生物名詞はそれを満たすことができず、主語になりにくい。一方、(17)のような「受動的な文」では、主語から目的語への働きかけが必要とされないため、働きかけの力を持たない無生物名詞でも主語になり得ることがわかった。

「所属関係の文」については、目的語への働きかけがある場合は、主語は(18)のように主体性のあるものが必要となるが、目的語への働きかけがない場合は、主語は(19)のように主体性でないものも成立することを指摘した。

(18) プラスティックのケースの中で小さなクローバーが四枚の葉を広げていた。

(= (15))

(19) 窓をあけると空気が澄んで、ひさしぶりに光の粒を含んでいた。(rosso)

(18)では、自然法則によって目的語名詞に働きかけるよう仕組まれているため、主語は主体的な自律性を持っているもので、植物や機械などの名詞が挙げられる。(19)では、目的語の「光の粒」には何も変化が起きず、外部からの働きかけがない。このような文では、主語が主体性のあるものかどうかの制約を受けない。

熊（2009）は「所属関係の文」を特殊な文として他の文に区別し、その特徴を記述したが、「能動的な文」と重複する部分がある。(18)は、主語と目的語の関係から「所属関係の文」に入れたが、「広げる」という動詞を考えれば、目的語名詞「四枚の葉」が「クローバー」に備わった内在する仕組みによって働きかけられ、「広がる」という変化が起きるため、「能動的な文」の特徴も持つ。また、熊（2009）では名詞句階層と他動性という2つの観点を軸に無生物主語他動詞文の容認性について考察を進めたが、名詞句階層と他動性の関係性を明確に把握できていない問題点が残る。

本稿では、他動性を真正面から捉え、主語から目的語への働きかけがある「能動的な文」と主語から目的語への働きかけがない「非能動的な文」に分け、2つのタイプの文

と名詞句階層との関係を解明する。さらに、無生物主語他動詞文の許容に影響を及ぼすものは、他動性と名詞句階層の他に何かあるのか、あるならば、それは何か考える。

3. 非能動的な文

「非能動的な文」は、主語から目的語への働きかけがないものである。収集した用例⁵⁾を分析すると、「非能動的な文」は下記の3つの場合に出現していることがわかった。

一つ目は「受動的な文」⁶⁾である。

- (20) 泰山木の花が、美しかった。大きな花びらが、恐れずに雨を享けて咲いている。
(= (11))
- (21) 今回の大会では、今年のポルトガル・リスボン大会で優勝した大阪市の産官学連携による人型ロボットが注目を集めた。
(産経 7.17)
- (22) 数年前、保険を乗り換えさせる「転換」セールスが厳しい批判を浴びた。
(朝日 7.6)

上記の文は形式上は他動詞の形をしているが、現実世界では主語名詞が動作の受け手である。例えば、(20)は、真の動作者の「雨」が目的語となって、動作の対象の「花びら」が主語となっている。現実世界での動作の方向は目的語名詞から主語名詞へと向かっている。新聞社説では(21)(22)のような動作名詞と受動的な動詞が組み合わさったものが述語部となる無生物主語他動詞文が多い。そのような文は受身文に置き換えることができるが、他動詞の形をとるほうが、改まった性質を帯びているように思われる。

(21') a. 人型ロボットが注目を集めた。

b. 人型ロボットが注目された。

二つ目は静態動詞が述語となる文である。

- (23) そうした時期に、患者の半数以上が死亡するような層が国内に存在していることは、日本の対策が現実に対応できていないことを示している。
(産経 7.1)
- (24) 保守派のユダヤ人から見れば、ガザは旧約聖書で神から授かった土地だ。入植者たちが悲しみの涙を流して兵士と抱き合い、去っていく光景は、ユダヤ社会が共有する歴史的な郷愁を象徴している。
(朝日 8.25)
- (25) 窓をあけると空気が澄んで、ひさしぶりに光の粒を含んでいた。
(rosso)
- (26) 今回の飛行は、宇宙開発の将来にきわめて重い意味を持つ。
(朝日 7.28)

静態動詞の規定は工藤(1995: 69-80)に従う。時間の展開性を持っていない、アスペクトの対立がない動詞のことを指す。(23)~(26)のとおり、「示す」「象徴する」のような〈関係・特性〉の動詞と「含む」「持つ」のような〈存在・空間的な配置〉の動詞が観察された。これらの動詞は形式的にはスル、シテイルがあるが、アスペクトの意味の違いに結びつかない。これについては、静態動詞と他の動詞のアスペクトの意味の違いの比較からわかる。(26'a)と(26'b)両方とも現在の意味を表すのに対し、(27a)は未来の

意味、(27b)は現在の意味を表す。

- (26') a. 今回の飛行は、宇宙開発の将来にきわめて重い意味を持つ。
 b. 今回の飛行は、宇宙開発の将来にきわめて重い意味を持っている。
- (27) a. 太郎は走る。
 b. 太郎は走っている。

三つ目は合成述語となる文である。合成述語の規定は高橋(1975,1985)に従う。述語が補語と一緒にあって、動作主体の動作を表している。「手をあげる」=「挙手する」、「あたまをたれる」=「うなだれる」、「ぼうしをぬぐ」=「脱帽する」のように、両方がくみあわさって自動詞相当となり、合成述語をなしている。次のようなものが観察された。

- (28) エイズの原因となる HIV (ヒト免疫不全ウイルス) の感染が拡大を続けている。
 (産経 07. 01)
- (29) 日本経済は小泉政権下で財政出動なき回復を実現した。
 (産経 08. 02)
- (30) 雨はさらに激しさを増し、すっかり**ずぶ濡れ**だった。
 (blu)

上記の文の述語部「拡大を続ける」「回復を実現する」「激しさを増す」はそれぞれ対応する自動詞がある。

- (28') エイズの原因となる HIV (ヒト免疫不全ウイルス) の感染が拡大している。
 (29') 日本経済は小泉政権下で財政出動なく回復した。
 (30') 雨はさらに激しくな**って**、すっかりずぶ濡れだった。

(28)~(30)は他動詞文の構造を取っているが、主語名詞はいずれも目的語名詞に働きかけるのではなく、自動詞文の主語に相当している。それが許容される理由として考えられるのは目的語名詞の性質である。目的語名詞は、いずれも主語名詞と対峙し得る1つの個体ではなく、主語名詞の側面を表すものである。目的語の「拡大」「回復」「激しき」は、それぞれ主語の「感染」「日本経済」「雨」の状態を表すもので、主語と目的語の所属関係は〈全体一側面〉である。この場合、主語名詞と目的語名詞は対峙し得ず、述語動詞は働きかける機能を失うことが許され、目的語とともに1つの自動詞の機能を果たすのだと考えられる。

また、(28)(29)では、目的語名詞「拡大」「回復」が動作名詞のため、述語動詞を除去して、目的語名詞を動詞にすることができるという特徴を持つ。(28)~(30)は自動詞で表現することができるのに他動詞を用いるのは、他動詞の形をとるほうが、改まった性質を帯びているからではないかと思われる。

次に「名詞句階層」との関係を考える。まず、名詞句階層が何を表しているのかを見る必要がある。それに関して様々な説が提案されているが、Silverstein 自身の解釈では、動作者になりやすいか、或いは動作の対象になりやすいかという度合を表すというものである。名詞句階層においては、階層の高い方は動作者になりやすく、低い方は動作の

対象になりやすい。無生物主語他動詞文に援用すると、動作者になりやすいものが主語に、動作の対象になりやすいものが目的語になる。主語から目的語への働きかけがある場合は、動作者と対象が存在するので、この説を援用することが可能であろう。だが、「非能動的文」は主語から目的語への働きかけは必要とされない。つまり動作者と対象が存在しない。この場合は、「名詞句階層」の制約を逸脱し、動作者になりやすいものかどうかを問わず、無生物名詞は主語になり得る。そのため、例(31)のような、名詞句階層説に違反するもの、主語名詞より目的語名詞の階層が高いものも成立する。

(31) 放課後のチャペルは樹木の茂った夏の庭からさし込む強烈な陽をうけていた。

(= (17))

「非能動的な文」は他動詞文の構造をとっているが、主語から目的語への働きかけがないため、働きかけの力を持つ無生物名詞（例：「風」）も、働きかけの力を持たない無生物名詞（例：「花びら」）も、主語になり得る。日本語には無生物主語他動詞文が普通に存在し、自然な文も少なくないと言っているのは、主に「非能動的な文」のことと考えられる。

4. 能動的な文

4.1 名詞句階層の角度

「能動的な文」は、主語から目的語への働きかけがある文で、目的語に働きかける力を持つものが主語として必要とされる。以下は名詞句階層説との関係を検討する。

(32) 台風が窓ガラスを割った。 (2.34点)

(33) ボールが窓ガラスを割った。 (1.94点)

(34) ハンマーが窓ガラスを割った。 (1.34点)

(32)～(34)の判定は2007年7月に学習院大学の日本語母語話者の学生211人を対象として実施したアンケート調査によるものである。例文の許容度を「自然=3点、やや不自然=2点、かなり不自然=1点、完全に不自然=0点」の四段階に分けて調査を行った。数値からわかるように、自然の力の名詞「台風」が主語となる文の許容度が最も高い。「ボール」と「ハンマー」は両方とも具体名詞であるが、「ボール」主語の文のほうが「ハンマー」主語の文より許容度が高い。それは、「ボール」はバットか何かの力がきっかけで飛んでいって、ガラスに当たったという出来事が想定されやすいのに対し、「ハンマー」は何かの力によって動くという出来事が想定されにくいからだと思われる。他動詞文の主語は、自発的に動くもの「台風」、何かの力がきっかけで動く想定されやすいもの「ボール」、何かの力がきっかけで動く想定されにくいもの「ハンマー」という順に許容度が下がることがわかる。それは動作者になりやすいものが主語になるという角田の名詞句階層の説に合致すると思われる。なお、(32)に関して、自然の力の名詞「台風」が主語の場合は適格性が最も高いが、判定は「2.34点」で、「自然=3点」

との間には差がある。自然さが欠ける理由については、4.2節「述語動詞の角度」で改めて検討する。

収集した用例の中には、無生物名詞の中で最も階層が高い「自然の力の名詞」が主語で、それより階層が低い無生物名詞が目的語となる文がある。

- (35) 夕陽がうすく教会に面した塀を染めていた。 (河)
- (36) 小高い丘を流れていく五月の風が荒れた頬の皮膚を浚っていく。 (Blu)
- (37) 雨は、信じられないこまかさで葉をふるわせ、空気をふるわせ、七月のケブレロ通りを濡らし続けている。 (Rosso)
- (38) 宮城県沖の海底下でマグニチュード(M) 7.2の強い地震が発生し、東北地方での震度6弱を始め、北海道から近畿地方までの広い範囲で大地を揺るがした。 (産経 8.17)

「自然の力の名詞」は自律的に事象を展開する能力を持っているので、動作者になりやすい。名詞句階層説に従い、これらの名詞が主語の場合は自然な文になる。自律的に事象を展開する能力を持つ無生物名詞は、「自然の力の名詞」の他に、植物や機械名詞も挙げられる。

- (39) プラスチックのケースの中で小さなクローバーが四枚の葉を広げていた。 (= (15))
- (40) 彼は背を伸ばし、家の中へ声を掛けた。「おい、草花の種が芽を出したぞ」 (植物群)
- (41) ただいま2台のパソコンがブンブンとファンをまわしています。

(<http://www.tomatogokoro.cocolog-nifty.com/tokoton/cat5327371/index.html>)⁷⁾

(39)～(41)では、主語名詞そのものに内在している機能が自律的に発揮され、その内在メカニズムによって目的語名詞の変化が引き起こされる。目的語に変化をもたらしたのは主語そのものに備わった内在する仕組みであるが、言語で表現する際には「クローバー」「草花の種」「パソコン」のような、内在する仕組みを所有する物が前面に現れて、直接的に目的語名詞に働きかけ、影響を及ぼす「動作主」のような振る舞いをするのである。そのような文の主語は、自然法則または行為のプログラム化によって目的語名詞に働きかけるよう仕組まれているため、主体的な自律性を必ず持っている。採集した用例では3種類の名詞が観察された。「風」や「地震」のような自然の力の名詞、植物名詞と機械名詞である。

「能動的な文」は目的語に働きかける力を持つものが主語として必要とされるため、動作者になりやすいものが主語になるという名詞句階層の制約を受ける。自律的に事象を展開する能力を持つものは、対象に働きかける主体として認識されやすいため、それが主語となる他動詞文は不自然に感じられない。しかし、無生物名詞は、動作者になるもの、すなわち自律的に事象を展開する能力を持つものが少ないので、(42)(43)のよう

な不自然な文が多い。多くの先行研究では日本語では原則として無生物名詞は他動詞文で主語として使用されないと指摘しているが、それは主に(42)(43)のタイプの文だと思われる。

(42) 鍵がドアを開けた。 (0.73点)

(43) 冷たいご飯がお腹を壊した。 (0.61点)

4.2 述語動詞の角度

前節では、能動的な無生物主語他動詞文は名詞句階層の制約を受け、自律的に事象を展開する能力を持つものが主語になりやすいことを述べた。だが、名詞句階層説だけでは、説明できないものもある。(44)では、自律的に事象を展開する能力を持っていない名詞「黒カビ」が違和感なく、他動詞文の主語になる。

(44) 黒カビが壁全体を覆っている。 (= (13))

(45) ?黒カビが壁全体を汚している。 (= (14))

それに対し、(45)は不自然に思われる。主語と目的語が同じものであるにもかかわらず、適格性が異なるのは何故だろうか。以下は述語となる動詞の角度から無生物主語他動詞文の容認性を考察する。述語動詞が有対他動詞の場合と無対他動詞の場合に分けて考える。

4.2.1 有対他動詞が述語となる場合

早津(1989: 231-256)によると、有対他動詞は対象に働きかけるだけでなく、対象の変化まで引き起こすということである。つまり、有対他動詞が述語の文は他動性が最も高い構文になるのである。そのような動詞が述語となる場合、対象の変化を引き起こす力を持つ主語名詞が必要とされるが、無生物名詞の場合は、そのような力が期待されにくいと、不自然、または不適切に感じられることが多くなる。

(46) ボールが窓ガラスを割った。 (1.94点) (= (33))

(46)が不自然に思われる理由は、主語の「ボール」が自発的な働きかけの力を持たないものであり、「窓ガラスが割れる」という状態を引き起こすにいたる動作を単独では行えないからである。「ボール」は「窓ガラスが割れる」よう力を作用させる前に、まず「窓ガラス」に接触しなければならないが、外部の何らかの力を借りなければ、動くことさえできない。(46)が成立するためには上記の一連の動きを保証するべく、推測によって何らかの補完がなされる必要があるが、推測は人によって異なるものなので、揺れが生じるのである。(46)の自然な表現は(46')ようになる。

(46') ボールで窓ガラスが割れた。

状態変化の引き起こし手である無生物名詞の「ボール」を主語にする他動詞表現より、状態変化を引き起こされた対象である「窓ガラス」を主語にする自動詞表現のほうが自

然に思われる。このことは、「スル」表現より「ナル」表現のほうが日本語として好まれるという説に理由を求めることができると考えられる。「スル」と「ナル」の表現に関して、寺村(1976)は日本語は事象の結果に関心を持つと指摘し、池上(1982)は〈推移〉(ないしは〈状態の変化〉)に視座のある表現を好むとしている。つまり、日本語では、引き起こし手が積極的に受け手に働きかけて変化を引き起こす表現は好まれず、受け手を中心として何らかの変化が起きたという自動詞表現が多く用いられる傾向があるということである。生物名詞が引き起こし手の場合でさえ、このような傾向が見られるのであるから、無生物名詞が引き起こし手となる場合は、生物名詞に比べてさらに焦点が当てられにくくなるだろう。無生物名詞を主語にする表現を避けて、動作の対象を主語にするほうが日本語らしくなるのはそのためではないかと考えられる。

有対他動詞が述語となる場合には、無生物名詞が主語になりにくいのが、ただし、次の動詞が述語となる場合は、「スル」と「ナル」表現の制約から抜け出すことができる。熊(2009)の調査からわかるように、「働きかけの様態に注目する動詞」と「感情動詞」が述語となる場合は、無生物名詞が主語になり得る。

(1) 働きかけの様態に注目する動詞

有対他動詞は動詞によって変化の仕方は様々である。その中には、変化が進展的・漸次的に進んでいくものがある。それらの動詞は「だんだん(しだいに)～してくる／～していく」などの形式をとることができる。

- (47) 雨粒は次第に顔の表面を濡らしていった。(Blu)
- (48) ありふれた下痢のような感染症で多数の子供が死んでいる国では、上下水道などの環境整備が乳幼児死亡率を大きく下げる。(産経 7.4)
- (49) 古くはゲートの「若きウェルテルの悩み」が自殺志願者を増やしたのではないかと**いわれた**。(産経 8.10)
- (50) 世界はすっかり変わった。廃虚と占領に始まった日本の変貌(へんぼう)は特にすさまじい。この間、一度も戦争をすることなく、経済・技術の発展は社会を別世界に変えた。(朝日 8.15)

前述したように、日本語では、働きかけの結果の状態に焦点が当てられるため、動作を引き起こす主体が背景化し、状態変化が引き起こされる対象が主語になり、自動詞文の表現が用いられる傾向がある。(47)～(50)が成立する理由として次のように考えられる。述語動詞が進展性を持つ動詞の場合は、働きかけの結果の状態のみならず、働きかけの過程の様態にも焦点が当てられることになり、動作を引き起こす主体が必ずしも背景化せず、無生物名詞であっても主語になり得るのではないだろうか。

それに対し、(51)のように「割る」⁸⁾のような瞬間動詞が述語動詞となる場合は許容度が下がる。

(51) 台風が窓ガラスを割った。 (2.34点) (= (32))

この場合、「スル」と「ナル」表現の法則が働く。瞬間動詞の場合は、働きかけの過程の様態は注目されないため、働きかけの主体である無生物名詞の「台風」は背景化し、主語になりにくくなる。対象である「窓ガラス」に焦点が当てられ、(51')のように自動詞文で表現されるほうが日本語らしくなる。

(51') ボールで窓ガラスが割れた。

働きかけの過程の様態が注目される場合は、無生物名詞がより容易に他動詞文の主語になることに関しては、次の現象からも裏付けられる。(52)と(52')を比べる。(52)のような他動詞文表現より、(52')のように、変化が起きた「砂埃」に焦点が当てられ、自動詞文で表現されるほうが日本語らしい。

(52) 大風が砂埃を上げた。 (0.67点)⁹⁾

(52') 大風で砂埃が上がった。

だが、述語動詞を単純動詞の「上げる」から複合動詞の「巻き上げる」に置き換えると、無生物主語他動詞文が成立することになる。

(53) 大風が砂埃を巻き上げた。 (2.67点)¹⁰⁾

複合動詞「巻き上げる」には働きかけの様態「巻く」と結果の状態「上がる」の両方が含まれる。(52)と違い、働きかけの過程の様態が注目されるため、動作を引き起こす主体が背景化せず、無生物名詞であっても主語になり得る。

(2) 感情動詞

有対他動詞の中には、「傷つける」「戸惑わす」のような感情を表す動詞がある。それらの動詞が述語となる無生物主語他動詞文が多く観察された。

(54) 悪意で言ったのではないのですが、こういう言いかたが従来の基督教の考え方に固まっている彼を傷つけました。(河)

(55) ところがあれから五年ものの歳月が経っているというのに、忘れさろうとすれば するだけしっかりと あおいの思い出は記憶されてしまい、ふとした瞬間、たとえば横断歩道を渡っている一瞬や、仕事に遅れそうで走っている最中、酷いときは芽実と見つめあっている時なんか、亡霊のようにすっと現れ出てきてぼくを戸惑わす。(Blu)

上記の例文では、目的語名詞は「彼」「ぼく」であって、どちらも生物名詞である。名詞句階層の方法論に従えば、不自然な文になるはずであるが、現代の日本語の文では、感情動詞が述語となる無生物主語他動詞文の使用が稀ではない。

何故「感情動詞」が無生物主語他動詞文の述語になり得るのかについて、感情動詞以外の動詞と比較して、その特徴を分析する。

(56) 花子の言葉が彼を傷つけた。

(57) ?花子の一撃が彼を倒した。

(56)は、「花子の言葉で彼が傷ついた」ことを表し、「感情動詞」が述語になっている文であるが、(57)は、「花子の一撃で彼が倒れた」ことを表し、「感情動詞」以外の動詞が述語になっている文である。どちらも現実世界で起こり得ることであるが、2つの文の適格性は異なり、(56)は(57)よりも自然に思われる。(56)の場合、「彼」は「花子の言葉」を聞いて、精神的に苦しむようになる。「彼」は精神的な葛藤などを経験するが、「彼」の示す反応は「彼」自身が消化して表に現れたもので、そこには「彼」の主体性を認めることができる。それに対し、(57)の場合、「彼」は「花子の一撃」を受けて、そのまま倒れたことになる。そこには「彼」自身の何の選択もないので、「彼」の主体性は認められない。このことから、「生物名詞」が目的語の場合に、無生物主語他動詞文が成立するためには、目的語の「生物名詞」に主体性が認められることが一つの条件になっていると考えられる。

以上、無生物主語の述語となる有対他動詞について考察した。有対他動詞の中では、働きかけの過程の様態に関心を持つ動詞と感情を表す動詞が、無生物主語の述語になり得ることがわかった。

4.2.2 無対他動詞が述語となる場合

無対他動詞は、有対他動詞と違って働きかけの過程の様態だけに注目する。動作の対象にどのような変化が引き起こされるのかには一切注目しないため、引き起こし手を主語とする他動詞表現を用いるか、変化が引き起こされた対象を主語とする自動詞表現を用いるかという選択はない。このことから、無対他動詞が述語となる場合、無生物名詞は主語になりやすいのではないかと考えられる。採集した用例から見ると、無生物名詞に使用され定着しつつある動詞が述語となるものが多い。

まず、基本的に人間または生物名詞の行為に用いられる動詞であるが、無生物名詞にも使用され定着しつつあるものである。

(58) だが、機体や外部燃料タンクから落ちていく物体を監視カメラがとらえたのが気にかかる。 (朝日 7.28)

(59) 修復たちの地味だが着実な仕事の世界の遺産を守ったのだとほくは誇らしくてならなかった。 (Blu)

(60) こちらの心情を無視した自分だけの身の上話は美津子の関心をほとんど惹かなかった。 (河)

(61) 吹き付け工事をしたビルの多くが、建て替えの時期を迎えている。 (朝日 7.8)

上記の例とは対照的に、本来は人間の行為を表す動詞が述語となっているものも観察された。

(62) 押し入れを覗くと波音のような躰が顔を撫でた。 (シネマ)

(63) ざーっと地面を打つ雨の勢いに視界は朦朧と煙り、ぼくという存在さえ呑み込まれようとしていた。(Blu)

(64) 雷鳴が速くて轟き、雨音がガラスを叩きはじめ、いつしかそのリズムの中でぼくは眠ってしまった。(Blu)

「撫でる」「打つ」「叩く」はいずれも手で行う動作であるから、身体部分を持たない無生物名詞の働きとして使用される場合、擬人化されたイメージが強くなる。文学作品では(62)～(64)のような文は少なくないが、アンケート調査の結果では、判定は「2.33点」となり、「自然＝3点」との間には差がある。文学作品と日常言語では無生物主語他動詞文に関して許容度に違いがあるものと思われる。

(65) 大雨がしきりに屋根を叩いている。(2.33点)

次は「存在関係」を表す動詞が述語となるもので、主語の位置変化によって、目的語に空間的な状態変化が引き起こされる文である。

(66) クルトン・ハイムは、大学のなかで最も古い落ちついた建物のひとつで、壁の半ばを蔦が覆い、一階には幾つかの集会室があり、二階がチャペルになっていた。(河)

(67) 駅前の大通りを曲がると、周囲の建物より一際大きな大聖堂ドゥオモのさらに最上部を覆う大円蓋が視界を遮った。(Blu)

(66)では、「蔦」が「壁」の表面に存在していることによって、「壁の半ば」が覆われている。(66)では、「大円蓋」が「視界」に存在していることによって、「視界」が遮られている。この場合は、主語は目的語に働きかけているわけではなく、主語の存在位置が目的語に変化を引き起こす原因となっているのである。

(68)と(69)を比べてみる。主語と目的語が同じ場合に、「存在関係」を表す動詞が述語となる文(68)は自然に思われる。(69)は述語「汚す」が有対他動詞で、(69)の事象を表すには、(69')のように自動詞文で表現されるほうが日本語らしくなる。

(68) 黒カビが壁全体を覆っている。(＝(13))

(69) ?黒カビが壁全体を汚している。(＝(14))

(69') 黒カビで壁全体が汚れている。

以上、無生物主語の述語となる無対他動詞について考察した。動詞によって無生物主語を取りやすいものと、取りにくいものがある。擬人化されるイメージが強い動詞は日常言語では文の許容度が低くなるものと思われる。

4.2節の考察では、文の許容度は動詞の性質と深く関わるのがわかった。有対他動詞が述語となる場合より無対他動詞が述語となる場合のほうが、文の許容度が高いと言える。ただ、有対他動詞の中では、働きかけの過程の様態に関心を持つ動詞と感情を表す動詞が、無生物主語の述語になり得る。

4.3 文章レベルの角度

無生物主語他動詞文の中には、単文レベルでは多少不自然であっても、文章レベルにおいては違和感がなくなるものがある。特に文学作品では多く見られる。

(70) ?手は包を開けていた。

(71) (受付の子は) 包を開けていた。

(72) 受付の方へ出て行くと、「社長」と受付の子が、「これが届きましたけど」と、チョコレートのおまけ合わせを指さした。

「まあ、誰から？」

「N 商店様。——お得意の一つですわ」

「ご丁寧ね。みんなで食べてちょうだい」

「いいんですか？」と言いながら、もう手は包を開けていた。(女社長に乾杯)

(70)と(71)を見れば、無生物名詞「手」を主語にする他動詞表現(70)より、「手」の所有者「受付の子」を主語にする他動詞表現(71)のほうが日本語として好まれる。しかし、文脈があれば、(72)のように自然な文になる。以下はどのような場合に無生物主語他動詞文が許容されるのか、文章レベルの角度から考える。

(1) 視点統一のため

無生物名詞は既に先行文または文の前件で登場する。視点を統一するために、他動詞文の主語にすることが可能である。

(73) マニカルニカ・ガートでは白い煙が川面に流れ、白い煙は人生をすべて終えた者たちを焼いている。 (河)

目的語名詞の「すべて終えた者たち」は主語名詞の「白い煙」より階層が高いため、名詞句階層に従えば、階層が高い「すべて終えた者たち」を主語に、階層が低い「白い煙」を目的語にする文が要求されるはずであるが、(73)では逆になっている。

この文が成立する理由は視点統一という観点から説明できる。「白い煙」は既に文の前件で登場したもので、「人生をすべて終えた者たち」は新しく登場するものである。新しく登場するものよりも、既に登場したものに視点を近づける方が容易であるために、「白い煙」は無生物名詞であっても主語になり得るのだと考えられる。

(2) 焦点化のため

先行文または文の前件で登場せず、新しく登場するものも他動詞文の主語になることがある。

(74) ①ミラノから戻ってきて、芽実¹は真面目に語学学校に通うようになっていた。②父親と会話ができなかったことが彼女を変えたのだ。 (Blu)

第②文は、第①文の「芽実¹は真面目に語学学校に通うようになっていた」ことを説明し

ている。「芽実¹は真面目に語学学校に通うようになっていた」ということについて、様々な理由が考えられるが、そのたくさんの理由の中から「父親と会話ができなかったこと」が挙げられ、新しい情報として提示されている。この文も名詞句階層に違反している。(75)のように他動詞文(75a)より、自動詞文(75b)で表現されるほうが日本語らしい。

(75) a. ?父親と会話ができなかったことが彼女を変えた。

b. 彼女は父親と会話ができなかったことで変わった。

しかし、(74)のような文脈がある場合には、「父親と会話ができなかったこと」という無生物名詞が主語に、「彼女」という生物名詞が目的語になっている文にも違和感を与えない。(75b)は単なる「彼女」をめぐる陳述であるが、(74)では、第①文の先行文脈から彼女に変化があったことがわかる。この場合には、その変化を引き起こした原因が何なのかということが最も知りたい情報となって焦点化され、原因となる部分を主語に置くことが可能となるのだと考えられる。

(3) 文学作品の表現効果のため

文学作品では書き手は特別な表現効果を狙って、無生物主語他動詞文を用いる場合がある。

(76) 受付の方へ出て行くと、「社長」と受付の子が、「これが届きましたけど」と、チョコレート²の詰め合わせを指さした。

「まあ、誰から？」

「N 商店様。——お得意の一つですわ」

「ご丁寧ね。みんなで食べてちょうだい」

「いいんですか？」と言いながら、もう手は包みを開けていた。 (= (72))

単文では「手」の所有者を主語にするのが自然な表現になるが、(76)では「手」が主語になっているのは、「手」でやったことと口で言ったことと切り離そうという意図が働いているからだと考えられる。口では遠慮しているが、行動ではほしいという受付の子の言行不一致の様態は、無生物主語他動詞文によって読者にわかりやすく伝えられている。

次も書き手が特別な表現効果を狙って無生物主語他動詞文を用いた例である。

(77) 私はどこかで切り上げようと思うのだが、二人が楽しそうで、やめるといい出せなかった。夕闇が部屋に、しのびこんで来た。

すると、急に恐怖が私を捉えた。明るいうちに話さなければならぬ。暗くなつてからは、勇気が出ないかもしれない。しかし、今日は話さずに帰ることは絶対に出来ない。 (夏)

「(私は) 怖くなった」と表現するかわりに「恐怖が私を捉えた」と表現することによって、「恐怖」が外からやってきて、「私」が恐怖によってコントロールされていることを

強調し、「私」の無力感を際立たせている。このような文は、文脈を離れて単文だけで考えると、不自然な感じが残る。

以上は「視点統一」「焦点化」「表現効果」3つの角度から文章レベルにおいて無生物主語他動詞文の許容度が上がることを述べた。その他にも何かあるのか、あるならば、それは何かについては、今後用例を増やして考察を深める必要がある。

5. まとめ

本研究を通して、以下の4点が明らかになった。

- (1) 無生物主語他動詞文の容認性の解明には、他動性が最も重要なポイントである。
- (2) 「非能動的な文」は名詞句階層の制約を受けない。無生物名詞は容易に他動詞文の主語になる。それに対し、「能動的な文」は名詞句階層の制約を受ける。この場合は、自律的に事象を展開する能力を持つものが主語になる。
- (3) 自律的に事象を展開する能力を持たないものも、他動詞文の主語になることがある。述語動詞の観点から考えると、有対他動詞が述語となる場合より無対他動詞が述語となる場合のほうが、文の許容度が高い。無対他動詞が述語となる場合は、無生物名詞に使用され定着しつつある動詞が述語になる。有対他動詞の中でも働きかけの過程の様態に関心を持つ動詞と感情を表す動詞が、無生物主語の述語になり得る。
- (4) 単文レベルでは不自然であっても、文章レベルから考えると、違和感がなくなるものが存在する。「視点統一」「焦点化」「表現効果」を求める場合は、無生物主語他動詞文の許容度が上がる。

注

- 1) 角田 (1991) から引用したもの。原著の出典: Silverstein, Michael. 1976. 'Hierarchy of features and ergativity'. In R. M. W. Dixon (ed.), *Grammatical categories in Australian languages*, 112-71. Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies, and New Jersey: Humanities Press.
- 2) 人間名詞は人間の属性を表す名詞である。例: 「男」「女」「学生」などがこれに当たる。
- 3) 固有名詞は人の名前を指す。例: 「太郎」「花子」などがこれに当たる。
- 4) 自然の力を指す名詞には地震、雷、火事、津波、大水、風などがある。
- 5) 熊 (2009) のデータを用いる。1960年代以降の文学作品12冊から無生物主語他動詞文849例、朝日新聞社説(2005年7月分、8月分)及び産経新聞社説(2005年7月分、8月分)から901例を採集した
- 6) 熊 (2009) で述べた「受動的な文」と同様である。
- 7) (41)はインターネットから採集したもので、文学作品と新聞社説では観察されな

かった。

- 8) 「割る」は「だんだん(しだいに)～してくる」などの形式をとることはできないから、瞬間動詞と認識できる。
- 9) 2007年9月には学習院大学大学院生6名の母語話者を対象に実施したアンケートである。例文の許容度を「自然=3点、やや不自然=2点、かなり不自然=1点、完全に不自然=0点」の四段階に分けて調査を行った。
- 10) 2007年9月には学習院大学大学院生6名の母語話者を対象に実施したアンケートである。

主要参考文献

- 池上嘉彦(1981)『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論—』大修館書店
- (1982)「表現構造の比較」『日英語比較講座 第4巻』大修館書店
- 石綿敏雄・高田誠(1990)『対照言語学』桜楓社
- 井上和子(1976a)『変形文法と日本語 上』大修館書店
- (1976b)『変形文法と日本語 下』大修館書店
- (1994)「他動性と使役文」『言語理論と日本語教育の相互活性化』津田日本語教育センター pp.85-102
- かねこ・ひさかず(1990)「非情物主語の問題から」『国文学解釈と鑑賞』55-7 pp.36-46
- 金田一春彦(1981)『日本語の特質』日本放送出版協会
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現』ひつじ書房
- 久野暲(1978)『談話の文法』大修館書店
- 須賀一好・早津恵美子編(1995)『動詞の自他』ひつじ書房
- 高橋太郎(1975)「文中にあらわれる所属関係の種々相」『国語学』103 pp.1-17
- (1985)「現代日本語のヴォイスについて」『日本語学』4-4 pp.4-23
- 角田太作(1991)『世界の言語と日本語』くろしお出版
- 寺村秀夫(1976)「[ナル]表現と[スル]表現 日英「態」表現の比較」(国語シリーズ 別冊4)『日本語と日本語教育 文字表現編』国立国語研究所
- 外山滋比古(1973)『日本語の論理』中央公論社
- 早津美恵子(1989)「有対他動詞と無対他動詞の違いについて」『言語研究』95号 pp.231-256
- ヤコブセン, ウェスリー・M. (1989)「他動性とプロトタイプ論」久野暲・柴谷方良(編)『日本語学の新展開』くろしお出版 pp.213-248

熊鷹 (2009) 『鍵がドアをあけた—日本語の無生物主語他動詞文へのアプローチ』 笠間書院

用例出典

基本資料 (全例採集したもの)

浅田次郎 (1997) 「オリオン座からの招待状」『鉄道員』集英社 (略称:『招待状』)、安部公房 (1962) 『砂の女』新潮文庫 (略称:『女』)、有吉佐和子 (1972) 『恍惚の人』新潮文庫 (略称:『恍惚』)、江国香織 (1999) 『冷静と情熱のあいだ Rosso』角川文庫 (略称:『Rosso』)、遠藤周作 (1993) 『深い河』講談社 (略称:『河』)、島田雅彦 (1992) 『彼岸先生』福武書店 (略称:『先生』)、辻仁成 (1999) 『冷静と情熱のあいだ Blu』角川文庫 (略称:『Blu』)、山田太一 (1987) 『異人たちの夏』新潮社 (略称:『夏』)、柳美里 (1997) 『家族シネマ』講談社 (略称:『シネマ』)、吉本ばなな (1988) 『キッチン』福武書店、吉行淳之介 (1967) 『砂の上の植物群』(略称:『植物群』)、綿矢りさ (2003) 『蹴りたい背中』河出書房 (略称:『背中』)

『朝日新聞』社説 2005年7月分、8月分、『産経新聞』社説 2005年7月分、8月分

補充資料 (任意採集したもの)

『CD-ROM 版 新潮文庫の100冊』、『中日対訳コーパス』、インターネット検索エンジン: <http://www.google.co.jp>

(ユウ・オウ 2008年博士後期課程修了/北京郵電大学)